



Do you like

some more

ENGLISH?



日本の英語学習事始め 1 ～江戸時代～

こんにちは。今日は、私たち日本人がいつのころから、どのように英語を学んできたのかをお話したいと思います。記録では、日本に英語という言葉をもたしたのは、九州に漂着したオランダ船の乗組員ウィリアム・アダムスというイギリス人からとなっています。



いつ頃ですか？江戸時代？

1600年4月19日なので、関ヶ原の合戦が始まる半年ほど前です。

漂着から9日後にアダムスは、徳川家康に召喚され大阪城に向かいました。この時に日本に英語を話す人は一人もいなかったようです。その後、アダムス（のちに三浦按針と名乗る）は征夷大將軍になった徳川家康の外交顧問に登用されますが、1639年に日本が鎖国政策をとったため、日本で英語が学ばれる機会は実質的になかったといえます。



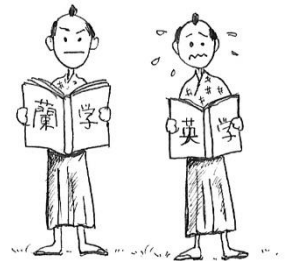
ふ～ん、じゃあ、日本人はいつから英語を学び始めたの？

ウィリアム・アダムスが漂着してから約200年後、1808年にフェートン号というイギリスの軍艦が長崎港に侵入する事件が起こります。



知ってます！フェートン号事件ですね！

この事件の経緯などはここでは省きますが、ある意味、偶発的に起こった事件で英語学習が始まることになりました。鎖国時代は、ヨーロッパの国々の中でオランダのみが日本と通商関係を結んでいましたよね。



ということは、オランダ語さえできればよかったですか。

フェートン号事件で、イギリスと日本の北辺を狙っているロシアを警戒した幕府は、1809年になって、ロシア語と英語の修学を長崎通詞に命じます。ここから日本での英語学習が始まるわけです。



でも、この時日本はまだ鎖国状態だったのではないですか？

そうですね。だから、日本が開国するまでの間は、暗中模索での学習だったのではないのでしょうか。なぜなら日本にイギリス人やアメリカ人がいたわけではないので、必然的にオランダ人を通じて英語を学ぶわけです。記録によれば、1809年来日した、オランダ人のプロムホフという人が英語の教授にあたった、とありますが、彼の英語力がどの程度だったのかはよくわかりません。

現存する最古の英語の手引書（辞書）あんげりあこうがくしょうせん「あんげりあこうがくしょうせん語厄利亞興学小笈」（1811 本木正栄訳述）に記された単語を見てみましょう。さて、元の単語はなんでしょう。

- ①ゲルル
- ②シセティ
- ③シュン
- ④ステルス
- ⑤ケレット

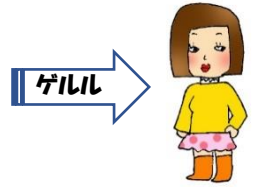


え～？これって英語！？ケレットって何か…お菓子？





正解は ①girl ②city ③sun ④stars ⑤create



同手引書にある文章になると、

**There is a fine tulip.** の読み方が

、「**デー**ル **イス** **エ** **ヘイン** **テュル**プ」で、和訳が「**彼**処に**美**なる**テュル**プあり」です。読みを見るだけでは英語とは分かりにくいですよ。

突然、英語を学ぶことになった長崎のオランダ語通詞（通訳）の人たちの並々ならぬ苦勞と努力がうかがえますが、果たして英語として通じたのかどうかも気になります。しかし、これだけの悪条件の中で、精力的に英語の学習に取り組んだ人たちには敬服します。

1814年、「諸厄利亜興学小笠」を完成させた本木さんを中心として本格的な辞書「諸厄利亜語林大成」が編纂されます。ここにはなんと約 6300 語収録されていますが、中学生で学ぶ英語の語彙がどれぐらいか知っていますか？



**さあ…数えたことがないんで。**



文部科学省の「学習指導要領」の指針では、中学校で学習する語彙は 1200 語程度とされています。高校ではこれに 1800 語が加わり、高校卒業レベルで 3000 語となります。江戸期に編纂された辞書の語彙数はその倍以上ということになります。

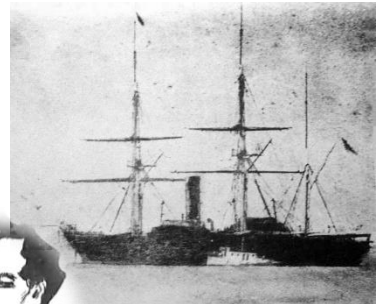


**フェートン号事件からたった 6 年！ほぼゼロからのスタートすごいですね！**



**日本が開国するきっかけになった、あの有名な黒船はまだ来ないの？**

ペリーがアメリカ合衆国海軍の艦隊を率いて浦和に来航したのが 1853 年。翌年の 1854 年には日米和親条約が締結され、Yeah 君がいう日本の開国となります。



**本格的な辞書ができてから 40 年ほどですね。では、この時は英語の学習の成果が出て、アメリカ側とは英語で外交をしたのですか？**

実は、この時の外交はオランダ語を介して行われました。日米双方がそれぞれの母語からオランダ語へ翻訳し、交渉したようです。ただし、この数十年間の英語学習にまったく進歩がなかったというわけではありません。外交という公の場ではオランダ語が採用されたものの、非公式の場において流暢な英語を話す日本人通訳のことが『ペリー提督日本遠征記』（Francis L Hawks 編, Narrative of Th Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, 1856）に記録されています。



**今回は、なんだか歴史の授業みたいだったなあ…。**

日本の英語学習は、“通詞”といういわば語学のプロフェッショナルが中心となって始まりましたが、明治維新を経て、学校制度が整うとともに、みなさんと同じ学生が英語を学ぶようになりました。次回は、明治期の英語学習について当時の教科書などを紹介しながらお話ししたいと思います。



To be continued...